

【国際交流回想録】

国際交流回想録

梶原 裕

九州大学名誉教授

九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）の学生時代は、週3回の英語論文・著書の輪読会に悩まされた以外は、英語や国際交流とは無縁でしたし、外国人と英語で会話した記憶も全くありません。その後の国際交流の経験を、所属した機関毎に分けて紹介します。

昭和大学医学部衛生学教室 (1975-1985)

昭和大学医学部で助手として働いていた1977年に、恩師佐藤方彦先生が吉田敬一先生を訪問されました。そこで、学術振興会により招聘されていたドルトムント大学のWenzel教授を講演者としてシンポジウムを開催してはとの提案があり、第1回人間-熱環境系シンポジウムが、空気調和・衛生工学会会議室にて開催されました。準備委員会は、後藤滋先生が代表となり、川島美勝先生が幹事としてシンポジウムの運営をされました。私も一委員として運営に参加し、このことが、私の国際交流活動の始まりでした。シンポジウム直前に開催された福岡での会議で、初めて英語による挨拶を経験しました。佐藤先生は、事前に”Dr. Wenzel”と話しかけては駄目です、”Prof. Wenzel”ですと何度も念を押されました。”Nice to meet you, Prof. Wenzel. My name is.....”が最初の私の英会話でした。

最初の海外出張は、1983年のカナダで開催された、国際人類学民族科学連合でした。ツアーで行ったため1週間で年収1/3相当の100万円を要しました。自費でした。当時は、科学研究費でも「海外旅費」の項目はなく、ほとんどの研究者は海外には自費で行くのが常識でした。女房には、4年に一度だからと、了解してもらいました。実際には、その数年後にはほぼ毎年海外に行きましたが・・・。学会発表は、散々でした。発表は、手元の英文をそのまま読んだので大丈夫でしたが、質問は全く分かりませんでした。英語、特に英会話の実力不足が身に沁みました。

国立公衆衛生院 (1985-1996)

1987年に開催された第11回国際生気象学会に出席するために、アメリカ・Indiana州にあるPurdue大学を梶井宏修先生(近畿大学)、田村照子先生(文化女子大学)、文化女子大学の大学院生とともに訪問しました。初めてのツアーでない海外旅行でしたが、この旅行中におよそ考えられる全ての海外旅行トラブルを経験しましたが、詳細は割愛させていただきます。

第13回人間-熱環境シンポジウム(1989年)は、北海道大学(横山真太郎大会長)にて開催されました。合わせてISO/TC159(人間工学)/WG5(環境人間工学)/WG1(温熱環境)の国際専門家委員会が開催され、私も委員として参加しました。委員のOlesen、Holmér、Havenith、Fanger各教授の講演も行われ、当時私が寒冷下作業の研究を行っていたこともあって、幸いにもHolmér教授からスウェーデンでの共同研究に誘われました。

国際交流活動を本格的に開始したのが1991年に開催された、第1回国際人間-生活環境系会議(ICHE)でした。海外担当幹事として、海外の研究者や海外参加者との連絡を担当しました。私の英語力では不安があったので、公衆衛生院の敷地内に、海外研究者のためのアパートがあったので、英語nativite(主に研究者伴侶)に週一回、1時間半研究室に来てもらい、英文チェック等を受けました。この形式の英語学習は、定年になるまで約30年間継続しました。

1994年には、スウェーデン労働衛生研究所での在外研究を楽しみました。カロリンスカ研究所隣にあった、Wenner-Gren centerという外国人研究者用高層アパートに滞在しました。アパートには幼稚園や映画館が併設され、200名程度の外国人研究者が滞在し、その多くが医学者でした。家賃は光熱費込み数万円/月で、当時のスウェーデンでの一般的アパートが安くても20万円であったので、非常に助かりました。公衆衛生院からの国際研修

は、原則2年間で一名であったので、採択されない場合には、私費で渡航するつもりで事前予約(2年前)していたのが幸いでした。

Holmér 教授の研究室では、博士課程男性と共同研究を行いました。彼は週3回のみの変則勤務でした。赤ちゃんの世話を自宅でパートナーと交互に行っていた為でした。研究会で彼は、わが子を背負って発表を行い、司会者から最年少の出席者と紹介されていました。わが国では、現在でも想像できないことです。当時の海外研修の原稿を本部会誌「被服衛生学」に送付したものの、スウェーデン夏の風物詩である「半裸のポスター(H&M)」の掲載は認められませんでした。

ISO/TC159/SC5 の日本主査(1995-2010)に就任したため、ほぼ年に2回は海外での ISO 専門家委員会に参加しました。3日間の英語による国際委員会では、最初の 1.5 日位は内容を何とか理解できましたが、後半は脳が思考を拒否し、内容が頭には入って来ませんでした。そのため、日本にかかわる ISO 議題は、一日目に行うように依頼しました。現在では、日本人研究者が WG の Convenor を務めることもあり、彼らが楽々と英語による議事の司会進行を行っているのを見ると心強いです。

九州大学 (1997-2013)

佐藤方彦先生の定年退職を機会に、母校に教授として赴任し、環境人間工学を担当することになりました。大学に移る際には、①古くなった特殊生態実験施設の改修、②国際会議の主催、③大型予算の獲得、を目指しました。幸いにも、2000年補正予算により、施設改修が認められ人工気候室9室を有する「環境適応研究実験施設」が完成し、アジアで最初に2002年第10回国際環境人間工学会(23カ国から295名参加)も主催することが出来ました。さらには、これらの成果が認められ、21世紀 COE プログラム「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点(2003-2007年)」が採択されました。COE では、国際共同研究推進だけでなく、博士課程学生の国際教育・研究支援が重要視されていたので、10カ国16名の博士学生・ポスドクを九州大学に招聘し、2週間 International Summer Workshop on Human Sensitivity を開催し英語による実習・講義を実施しました。この経験が、九州大学における International Course として英語のみによる大学院教育につながっています。



International Summer Workshop (2005)

残念ながら、大学院生が研究に協力してくれたものの、研究室の常勤職員は私だけでした。そこで、日本学術振興会(JSPS)に特別研究員制度(いわゆるポスドク)があり、さらに研究室評価は JSPS ポスドク数によって決まると兄(当時九州大学教授)から聞いて、積極的に応募しました。定年までに、6名の JSPS ポスドク(3名が外国人)と COE 等ポスドク4名を採用し研究が大いに進みました。英語しか話せない研究者が増えたため、ゼミは英語で行うことにしました。院生、卒研生は当初戸惑っていたものの、実験等での交流で、半年後には英語のゼミも違和感なく行えました。科学研究費の基盤 S、A が採択された際には、Joo-Young Lee (現ソウル大学教授)、若林斉(現北海道大学准教授)、橋口暢子(現九州大学医学部教授)のポスドク、さらには博士学生としてインドネシアから Titis Wijayanto (現 Gadjah Mada 大学講師) と Ilham Bakri (現 Hasanuddin 大学准教授)、韓国からの Su-Young Son (現慶北大学助教) が研究室に所属していました。そこで、以前 JSPS 論博制度を利用して学位取得後マレーシア Sains Malaysia 大学に就任していた Mohamed Saat 准教授との共同研究を企画しました。マレーシア人学生10名を九州大学に2週間招待し各種暑熱実験を行い、体力や体格を一致させた福岡在住日本人学生10名と比較しました。さらには、福岡に5~61カ月滞在している熱帯住民(九州大学大学院学生)の耐暑・耐寒性や皮膚温度感受性実験を実施し、暑熱適応能の「脱順化」についても検討を加え、研究成果は、国際英文誌に原著11報掲載出来ました。

英会話の経験も全くなかった30歳前から開始した、私の国際交流活動は、20年近く共同研究を行った大中忠勝先生(福岡女子大学名誉教授)、共同研究者、ポスドク、大学院生、卒論生の皆様とともに行ったものです。深謝します。

<連絡先>

栃原 裕 Eメール: tochiyara@kyudai.jp